

聖書 列王記第二10章12～27節

説教:あなたの心は真っ直ぐですか

はじめに

いつものように、前回までのあらすじを振り返ってから今日の箇所に入ります。イズレエルの町に住んでいたナボテは、北イスラエルの七代目の王であったアハブから、ぶどう畑を売ってくれないかともちかけられます。しかし信仰者であったナボテは、「先祖が神から譲り受けた大切な土地なので、例えあなたが王であっても売ることはできない」と言って断った。これを聞いたアハブの妻イゼベルは悪知恵を働かせて、ナボテを合法的に殺し、無理矢理にぶどう畑を奪ってしまいます。神はこの一部始終をご覧になり、かならずアハブの子孫にわざわいをもたらすと誓います。それから三十年経ち、エフーが北イスラエルの王に立ったとき、エフーのはアハブの子どもたちとイゼベルを倒したことで、主のみことばが成就しました。

今日のところでも、エフーの手で人が死んでいきます。前半の方では、ユダの王アハズヤの身内の者たち四十二人、後半では、異教の神々バアルを信じる者たちが神殿に集められて一斉に殺される。それも、こんなことをしてよいのかと目を疑うような手段によってです。これをどう考えるのか。このどこの神の恵みがあるのか。今日は、三つのエフーが語ったことばに注目していきます。

1 エフーとヨナダブ

1) エフーのことば その1 (15節)

今述べたように、エフーは主のみことばに従ってアハブの一族を滅ぼしましたが、それですべてが終わったわけではありません。北イスラエルの首都であるサマリアには、まだ異教の神であるバアルを拝む者たちがいて、大きな力を振るっています。アハブはこの神を信じて、国の中に大きなわざわいをもたらしました。この神々を国内から一掃しない限り、真の平和はありません。そこでエフーはサマリアに向かいます。

その途中、エフーはレカブの子ヨナダブに出会います。そのとき二人のやりとりはこうでした。15節後半から17節。「『あなたの心は、私の心があなたの心に対してそうであるように、真っ直ぐですか。』ヨナダブは、『そうです』と答えた。『そうなら、こちらに手を伸ばしなさい。』ヨナダブが手を差し出すと、エフーは彼を戦車の上に引き上げて、私と一緒に来て、主に対する私の熱

心さを見なさい』と言った。エフーは彼を自分の戦車に乗せて、サマリアに行った。」

ここでエフーが語ったことばの一つ目に注目します。おそらく皆さんはエこう理解したのではないのでしょうか。「私の心は真っ直ぐだけれど、あなたの心も真っ直ぐですか。」でもおかしい。信仰者であるエフーが、自分のことを「私の心は真っ直ぐです」と言うはずはありません。エフーはこう言っているのです。「あなたと私は同じ所を見ているのではないか。そう自分には感じられるけれど、あなたもそうですか？」具体的に言うともわかりやすい。エフーはこれからサマリアに行って、バアル信仰をこの国から一掃しようと思っているけれど、あなたもそのことをずっと以前から願っていたのではないか。もしそうであるなら、私と一緒に行きませんか。そういうことだった。

2) ヨナダブの子孫たち

どうしてこんな質問を初対面のヨナダブにしたのか。そのことを見る前に、ヨナダブとはどんな人物であったのかを見ておきます。ここには一切説明がありませんが、エレミヤ書35章にヨナダブのことが出てきます。エレミヤは、ここに書かれている出来事からおおよそ百年ほど経った時代に活躍した預言者です。そのエレミヤに主はこう語ります。「レカブ人の家に行って彼らに語り、主の宮の一室に連れて来て、彼らに酒を飲ませよ。」(エレミヤ書35章2節)実際にエレミヤがそうしようとしたらレカブ人からこんな反応が返ってきた。「すると彼らは言った。「私たちはぶどう酒を飲みません。というのは、私たちの先祖レカブの子ヨナダブが私たちに命じて、『あなたがたも、あなたがたの子ども、永久にぶどう酒を飲んではいけません。あなたがたは家を建てたり、種を蒔いたり、ぶどう畑を作ったり、また所有したりしてはいけません。あなたがたが寄留している地の面に末長く生きるために、一生、天幕に住め』と言ったからです。」(同6節)

ヨナダブはこのようなことを子どもたちに命じたのには理由がありました。彼は信仰者として、人々がバアルの神々を拝み、イスラエルの神である主を捨てたことに心を痛めていました。また、ナボテの畑事件のことで分かるように、正しいことがないがしろにされ、間違ったことが堂々と

行われてもだれも何も言わない、そんな曲がった時代のことを憂っていました。けれどもヨナダブには積極的に世の中を変えるような力はない。そこで彼はある決断をした。霊的に乱れている町の人々から離れよう。自分たちは荒野に天幕を張り、羊を飼って暮らすことにしよう。また、ぶどう酒を飲むとということを止めて、主が必ずこの罪の世界を正して、正義を回復してくださることを祈っていくことにした。

3) エフーと一緒にいく

こんなわけですから、ヨナダブは人々からは変人とか偏屈屋と呼ばれて馬鹿にされ、まともに相手にされない。そういう人だったと想像します。

ところがエフーは違って、ヨナダブを見たときすぐにピンときた。ヨナダブは自分と同じく主を見上げ、主の前に正しく歩みたいと願っている、同じ信仰者であると直感したのです。それで先ほど見たように、エフーが問いかけ、ヨナダブが「そうです」と答えた。ヨナダブもまたエフーと同じく、この地上に主の正義を回復しなければならぬと願っている者だと直感します。このようにお互いの信仰を確認したエフーは、ヨナダブの手を取って自分の戦車に乗せ、こう告げます。「私と一緒に来て、主に対する私の熱心さを見なさい。」その熱心さがどのようなものであったのかは、17節以降に記されているとおりです。

4) 神からの評価

そのようなエフーに対して主はこのように語ります。30節。「あなたはわたしの目になつたことをよくやり遂げ、アハブの家に対して、わたしが心に定めたことをことごとく行ったので、あなたの子孫は四代目まで、イスラエルの王座に就く。」

このように神から高い評価をいただいたエフー。それにしても、彼がやったのは虐殺ということではないのかという疑問は拭い去れません。

2 バアルの霊的な影響力と悲惨

1) イゼベルのしたこと

そこでまずもういちど思い起こしていただきたいのは、イゼベルが何をしたのかです。ナボテの畑を手に入れるために、偽りの証言者を立てさせ、裁判を開いてナボテを有罪とし、死刑にしました。これを実行させるためにイゼベルは関係者に手紙を送り、必ずそうするようにと脅迫した。この手紙が届いたとき、みなこれはおかしいと心では思ったのです。でも恐くてだれもイゼベルの命令には逆

らえない。それでみな、ナボテ殺しに手を貸してしまった。そんな世の中にしたのはだれか、です。もちろんアハブとその妻イゼベルが張本人。しかし問題の核心は彼らではない。イゼベルが北イスラエルに持ち込んだバアルの神々こそが本当の問題で、このバアルが北イスラエルを霊的に墮落させてしまった。なので、主の正義を取り戻すためには、バアル礼拝を徹底的に破壊しなければなりません。それでどうするか。バアルの神殿を壊したらそれで終わりなのか。そうではない。人々のこのころの中から、バアルを取り除かなければ本当の解決にはならない。

2) エフーのことば その2(18節)

それでエフーはサマリアの人々にこう告げます。18節。「アハブは少ししかバアルに仕えなかったが、エフーは大いに仕えるつもりだ。」

今日考える、エフーが語ったことばの二つ目です。これをどう理解するか。彼はアハブ以上にバアルに仕えると宣言して、嘘をついた。そう思うでしょうか。ところがよく読むとそうではない。アハブはバアルに仕えたとちゃんと言っている。では、エフーは何に仕えているのか。言っていますか。実は言っていない。彼は実はこう言っていたのです。「アハブは少ししかバアルに仕えなかった。けれどもエフーは主に熱心に仕える。」こんなことを言うと、皆さん「ええ!？」と思うでしょう。だったらはっきり「エフーは主に仕える」と言うべきではないか。人々はすっかり誤解して、その結果殺された。だまし討ちと言われても反論はできないのではないか。

本当にだまし討ちでしょうか。エフーがサマリアに来る前に、彼が何をしてきたのかサマリアの人たち知らなかったのでしょうか。当然知っている。イゼベルを倒し、その一族を全員滅ぼしてきた。そうしたの、エフーが主を信じていたから、ということも当然知っていた。そのエフーがサマリアに来て、突然「私はバアルに熱心に仕えます」と言うのか。口が裂けてもエフーは絶対に言うわけがない。ですから、18節のエフーのことばを聞いたとき、人々は気がつかなければならなかった。エフーは、熱心に主に仕える。そう言っているんだ。なのでこれから徹底的にバアルを破壊していくけれど、あなたがたはその覚悟ができていますか。そう言っていたのだ、と。実は、こうやってエフーは悔い改めの機会を与えていたのです。エフーがこれまでしてきたことを見たら、サマリアで

これから何が行われるか、言わなくても分かるはず。だから、いまずぐにバアルから離れなさい。

しかし、バアルのためにすっかり霊的に鈍感になっていたサマリアの人々は、エフーの呼びかけの真意に気がつかず、安心しきって神殿に集まります。残念ながら彼らはイゼベルの身に降りかかったことを見てもなお、彼らはバアルの神々から離れようとはしませんでした。

3 エフーのことば その3 (23節)

最後にエフーが語った三つ目のことばを見ておきます。23節。「よく見回して、ここには主のしもべがあなたがたと一緒に一人もおらず、ただバアルの信者たちだけがいるようにせよ。」

まことの神を信じる信仰者が一緒に滅ぼされることのないようにと、エフーが細心の注意を払ったということです。でもこれは言い換えればこういうことにならないでしょうか。「もしここに主を信じる者がいるならば、主はあなたがたを滅ぼすことはない。」

あのアブラハムのことを思い起こします。ソドムの町を滅ぼすためにやってきた御使いに対して、もしソドムの町に十人の正しい者がいたなら、滅ぼさないでください。」そう願ったとき、御使いは「滅ぼしはしない」と約束されました。

そう考えていくと、私たちはクリスチャンとしてこのねじ曲がった罪の世でどんな役割が与えられているのか、改めて気がつきます。私たちは少数です。力もない。しかし、ヨナダブのように神の正義が実現し、地に平和がもたらされるようにと祈る役割が与えられているのではないか。その祈りを聞いておられる主は人々にわざわいをもたらすことを思い直し、悔い改めの機会を与えようとされている。十字架のイエスのもとに来て、罪を告白し、罪から救われなさい。いま、主は私たちに呼びかけ続けてくださっています。